



＼出張講義のご案内／



大和の学び

天理大学文学部国文学国語学科

天理大学は、日本最古の道である「山の辺の道」の中ほどに位置しており、創立から九十有余年の歴史を誇る大学です。各専門分野をとおして社会に貢献できる人材を育成すべく、日々の教育研究活動に励んでいます。奈良出身の学生も多く、大和の地に根ざし、大和の文化と向き合ってきました。

このたび、そうした教育研究の成果をひろく公開し、地域社会に貢献しようと、このようなリーフレットを作成しました。奈良・大和の言語文化について多角的かつ啓蒙的にお話しさせていただきたいと思えます。ぜひお役立てください。



大和の学び

担当教員一覧



仁尾雅信

専門分野 中古文学（平安時代）

平安文学における「なら」

「なら」は、『伊勢物語』では初段に「奈良の京、春日の里」が登場し、23段に「河内の国、高安の郡」の女と対比された風流な大和の女が描かれています。『源氏物語』では、玉鬘と浮舟に関する場面に長谷観音が



重要な役割を担っています。また、和歌では皇室を寿ぐと同時に藤原氏を寿いだ歌が多く詠まれています。『枕草子』や『蜻蛉日記』などでは、作者が好んで長谷寺参詣に来たことを記しています。様々な作品に、その作品特有の描かれ方をしています。平安時代の人々は古きよき都「なら」をどのように意識していたのか、このようなテーマのもと、講座を3回行いました。

川島二郎

専門分野 上代文学

柿本人麻呂の相聞歌

後世に歌聖と称される柿本人麻呂は、天理大学の東を走る山辺道周辺で生まれ育ちました。少し南の巻向山あたりには、妻問う女性がいたようです。その女性の許に通う際の歌が萬葉集に収められています。



わが袖に霰降り来る巻き隠し
消たずてあらむ妹が見むため

降ってきた霰を、袖に巻き隠し持って行き妻（妹）に見せてやろう、という歌です。現実にはかえって溶けてしまい無理でしょうが、妻の許を訪れる若い人麻呂の弾んだ心持がそこに読み取れます。他にも、その妻に関わる人麻呂の青年期の歌が、萬葉集には残されています。

佐藤愛弓

専門分野 中世文学

大和の説話・伝説

大和はうるわしの古都として、またいつくしき寺社のある地として、説話や伝説の舞台になりました。「元興寺縁起」では、勉強家の僧侶智光さんと、眠ってばかりだった頼光さんのどちらかが死後良いところに生まれる



かが問題になります。また「三輪山伝説」では、夜ごと通ってくる夫の正体を知ろうとした女性とその真の姿に驚愕することになります。古代と中世では神のイメージが変容します。このような大和を舞台とした説話・伝説についてお話ししたいと思います。

西野由紀

専門分野 近世期（江戸時代）の文学

文人たちの見た吉野

江戸時代、多くの文人たちが大和国吉野郡を訪れました。そのなかに、国学者・本居宣長と読本作者・上田秋成とがいました。それぞれ吉野紀行のことを記録しているのですが、とくに秋成は、先に吉野を訪れた宣長の揚げ足をとるようなことを記しています。じつは宣長と秋成には、日本の古代における音韻をめぐる論争したという因縁がありました。ふたりの言説をとおして、古代の文化を色濃く残す吉野が、江戸時代の文人にとってどのような土地であったのかを解き明かします。ほかに、「井原西鶴がえがく江戸時代の奈良」「紀行文にみる江戸時代の大和」などのテーマで講座をおこないました。



吉田茂晃

専門分野 日本語（とくに奈良・平安時代と現代）

萬葉の音韻と文法

平成23年度講演「萬葉びとのことば」では、上代特殊仮名遣とその音韻論的解釈について述べました。日本語の母音は八つだったという、いわゆる八母音説に対し、実は奈良時代は三母音体系から五母音体系に移行する過渡的な混乱期であって、確立した音韻として母音が八つあったとは考えるべきでない旨をお話ししました。平成25年度講演「萬葉表現における過去と詠嘆」では、「けり」という助動詞の萬葉集における用法を精査して、なぜ過去と詠嘆という二つの（表面的には互いに関連のない）用法を「けり」という一つの助動詞が実現させるのか、その仕組みを解説しました。また、助詞「も」や助動詞「つ・ぬ・り」なども研究対象です。



北川扶生子

専門分野 近代文学（とくに明治時代）

浪漫派詩人があこがれた奈良

詩人・随筆家の薄田泣菫は、東西の詩に通じて各種の新詩律を試み、キーツやワーズワースに心酔してソネットを日本語で試作したり、古語や廃語を連ねた文語定型詩で精緻な象徴詩を創り上げたりして、藤村以後の浪漫詩の後継者と目されました。耳遠く難解な古語の多用によって清新なイメージを読者に伝えることに失敗したとの批判も受けてきましたが、詩語の豊富化をねらった古語の復活・転用とその効果は、日清・日露戦争頃の、国民国家体制と言文一致体とが確立する時期における文学的表現を広く視野に入れながら再評価する必要があります。ブラウニングの詩から着想を得て奈良への憧れを歌った文語詩を中心に、泣菫の表現の歴史的意義を探ります。



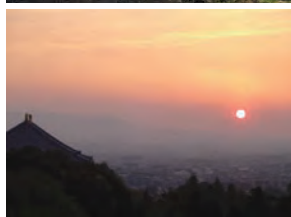
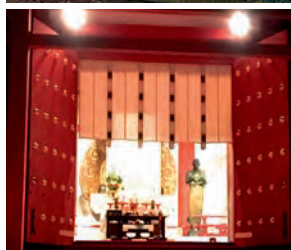
濱田 秀

専門分野 国語学

「大和」という言葉

「大和」という言葉は奈良県の旧国名ですが、「大和歌」「大和絵」のように外国、特に中国に対して「日本」全体を指す意味にまで拡大して使用されます。「大和柿」「大和芋」などは奈良原産のものを言いますから、「大和一」という要素が複合語を形成する場合には、「奈良県」を指す場合と、「日本全体」を指す場合がある訳です。「大和」をさらに遡れば、天理市あたりの地名と考えることができます。「奈良」という言葉も「奈良絵」「奈良漬け」のように複合語を構成しますが、そこに「日本全体」を指す用法は見当たりません。「大和」という言葉の変遷をたどり、その背後にある人間の認知構造を考えます。





■ お申し込み方法

出張講義実施までの流れ

担当教員一覧からご希望の講義を選択してください。



天理大学国文学国語学科共同研究室へ電話かEメールでご連絡ください。



天理大学国文学国語学科共同研究室助手と担当教員とで
実施日や時間を調整し、ご連絡いたします。

※実施日程につきましては、本学の授業や行事、教授会等によりご希望に添えない場合もあります。

■ 費用

一切いただきません。

■ 時間

講義は基本的に45分～60分です。内容によって若干の調整も可能です。

■ 出張講義に関するお問い合わせ

天理大学国文学国語学科共同研究室

TEL ● 0743-63-9037 (受付時間9:30～17:00)

E-mail ● kokubun@sta.tenri-u.ac.jp